

美術部へようこそ! 滋賀県大津市立瀬田北中学校

今回、登場するのは、滋賀県大津市立瀬田北中学校美術部。制作中、明るく声をかけ合う姿が印象的な美術部が、ふだんから大切にしていることを中心にお伝えします。

教え合いのある美術部に

放課後の大津市立瀬田北中学校、美術室前の廊下には、油絵を載せたイーゼルがずらりと並ぶ。真剣な面もちでそれぞれの作品に向き合うのは美術部の部員たち。同校美術部は女子36名の部員で構成される。

「上下関係はあまり感じたことがない。仲のよい部だ」という2年生の部員の言葉どおり、制作の合間に声をかけ合う姿が見られ、個別の作品に取り組んでいても、部の連帯が感じられる。

顧問の梶岡 創 先生は語る。「美術部というのは、運動部のように先輩・後輩間での『教え合い』が生まれにくい部活動だと思います。でも、せっかくここに所属してみんなで活動しているのだから、お互いに教え合っていける部であってほしい」。思案の末、考えついたのが、「ミニテクニック」の課題だった。「落ちた水滴がぶるぶると震えながらとどまる様子を描く」などといった、いわば「小技」の手法がいくつも収められたファイルが用意しており、部員は、そこから選んで課題に取り組む。

先輩が過去に経験した課題に後輩が挑戦することになるため、自然に、「自分はこうした」という助言が発せられるようになるのだという。

「さらに、部員として活動していることを見せるという意味を込めて、毎月1回、その間に制作した作品を部内で発表し合う『鑑賞会』を設けています。他の部員からのコメントも求めるけれど、大切なのは、『この1か月、美術部員としてこれだけ活動したんだ』ということをもみな



運動部の活動の様子をかたどり、パステル調のペンキで色を塗った。

の前で言えること」と、梶岡先生は続ける。

鑑賞会は、部の一員であることの自覚とともに、他の部員の活動へ向ける意識をも促しているようだ。

廊下に浮かぶ存在感

美術室前の廊下の壁には、色彩豊かで自由なポーズをとる人影が描かれている。ジャンプをする影、バットを構える影などさまざまあり、昨年、美術部員が共同で制作したものだ。自分たちでアイデアを出し合っ、ポーズをとった人物の写真を実物投影機で壁に映し出し、それをトレースして制作するのだという。

過去、同校の選択の授業で行われていたこの影の制作（『美術2・3上』教科書P12にも同様の作品を掲載）。「自分たちもやってみたい



左/部員が多く、美術室では手狭なため、廊下を使って制作に励む。右/文化祭の美術部展に出品するため、大きな作品を共同制作する1年生。



撮影 鈴木俊介

という声が上がリ、美術部の存在感を浮き立たせるようなこの壁画の完成となった。「校内で『誰がつくったの』と注目されて、『私たちだよ』と誇らしい気持ちになった」と話す部員。教え合い、ともに活動する美術部がここにある。

野外造形展は楽しい

造形「さがみ風っ子展」

神奈川県相模原市で、毎年秋に開催されている造形「さがみ風っ子展」。市立の小・中学校の児童や生徒の作品を中心に展示するほか、飛び入りで制作を体験できる造形コーナーも設置され、毎年多くの人が訪れます。



大きなアスレチックや、広い芝生の広場があるみずのへ 淵野辺公園。野外造形

展の期間中は、多くの人々が来場し、にぎわいを見せる。地域に定着した造形「さがみ風っ子展」。スタートしたのは1979年のことだ。第1回の会場となった広場は一面が雑草に覆われていたため、教師が総出で草刈りをするところから作業が始まったという。まさに教師の努力によって生まれた造形展といえるだろう。今では、市内の恒例行事となり、昔出品した子どもが大人になり、自分の子どもを連れて来場する姿も見られる。

そこが野外造形展での子どもと教師の腕の見せ所だ。また、ふだんはつくることができない大きな作品をつくるチャンスとあって、共同制作に取り組む学校もある。一つの画面に向かってクラスで力を合わせて描いたりする過程で、きっと子どもどうしの絆も深まることだろう。

現在では、大学生などを中心としたボランティアが造形展をサポートしている。また、野外の展示とあわせて、女子美術大学アートミュージアムにも作品が展示される。地域の力を原動力に、造形「さがみ風っ子展」はこれからいっそう盛り上がっていくことだろう。

野外造形展の大きな特徴は、展示の環境だ。公園内の林に生えている木々に作品を結び付けたり、木の棒やつるなど自然の素材でつくった作品を、直接地面に置いたりといった、室内ではできない展示が可能になる。どんな大きさの作品を、どんなやり方で見せるのか、



ダイナミックな展示ができるのも野外造形展ならではの。

放課後
第2回
ART